

〔書評と紹介〕

小泉 敦著

『北』の地域史 五戸・三戸・八戸』

中野渡一耕

本書の著者小泉氏は中学校教師（現南部町立杉沢中学校教頭）として、長らく学校教育現場に勤務する一方、近現代の研究者として青森県史や八戸市史の編さんに携わってきた。本書は、氏の学生時代からの研究テーマである自由民権運動についての論考や、青森県史研究や八戸市史研究等に発表した論文、また地元紙や自治体の広報紙への連載を、五十歳を迎えたのを機に一冊にまとめたものである。小泉氏の地域に根ざした着実な研究活動は、専攻分野は異なるとはいえ、同じ青森県南地域に生まれた筆者も見習いたいと感じていたものであるが、このように一冊でまとめた読むことが出来るのは喜ばしいことである。

本書の構成は以下のとおりである。

第一章 五戸近代史

『三浦日記』を読む

大沢敬次郎日記

動員された五戸満蒙開拓団の悲劇

津軽人と南部人

第二章 三戸近代史

近代三戸のあゆみ

第三章 八戸近代史

「大八戸」論と松尾鉾山く太平洋と八幡平をつなぐ道く

プランゲ文庫と八戸く占領期の八戸く

「戦争遺跡」に学ぶ

戦争下、八戸の暮らし

北からの自由民権運動く「憲法構想」と「憲法草案」く

小田為綱の「憲法草稿評林」

補論 「南」からのアプローチ

京都府下南山城地方の自由民権運動（上）（下）

「天橋義塾小室信介・沢辺正修没後百年をしのんで」に参加して

平和へのメッセージくバリ島「爆弾テロ」事件に学ぶく

「南」の国・インドネシアに学ぶ

あとがき

第一章の中心を占めるのは地元紙に連載された『三浦日記』を読むである。三浦日記とは五戸町在住で、平成六年に九十三歳で亡くなった三浦茂雄氏の日記である。三浦氏は昭和天皇と同年で、昭和二年に二十六歳の若さで青森県師範学校付属道代用小学校の校長に就任、昭和三十二年に戸来小学校の校長で退職するまで、青森市や三戸郡内でその教員生活の大半を校長として務めた。退職後も五戸町の教育委員などを務めている。もっとも、三浦氏自身は世に知られた人物とは言い難く、いわば市井の人物である。同じ章には旧倉石村在住で、昭和八年か

ら十四年まで満州に出征した大沢敬次郎氏の日記の紹介もあり、政治家や著名作家等ではない、庶民の記録から戦前から戦後の激動期の暮らしを明らかにするというアプローチである。特に三浦日記は著者小泉氏と同じ教員の日記として氏の関心も高かったであろうし、生活史や教育史の観点からも貴重なものであると言えるだろう。

一般に日記といっても記載者の置かれた立場、主観によって大きく内容も変わるものだが、小泉氏は三浦氏の主義主張には深入りせず、淡々と事実を記す。三浦氏も戦時中は当時の国民の常として戦争を称賛し、教え子を戦場に送った世代である。占領期の日記が欠落しているので戦後の価値観が急変した時期の胸中を推し量ることはできないが、戦後は平和を希求し、日本の繁栄を願う一老人となった。

本稿の構成は新聞連載そのままに全六一回で構成され、学校長としての学校経営や子どもとの関わり、地域の人々との交流、満州事変や太平洋戦争勃発、戦後は平和条約の締結、オリンピック開催などその時々の歴史の出来事に対する所感、津軽や南部各地の風習や習慣についての記述など多岐にわたる。筆者は戦前の修学旅行、欠食児童への対応、国民錬成所などに興味を覚えた。終戦の日、敵機から奉安殿を守るために、万一を覚悟して遺書を認める場面など当事者ならではの臨場感である。現在の我々にとっては歴史的事象でも、記載者の三浦氏にとっては同時代の出来事をそのまま記している訳で、小泉氏のいう「その『時代』を呼吸しているような錯覚を覚える」ことが出来よう。

本来日記は他者に見せることを前提としているわけでないので、その記述も本人以外は分かりづらいこともあるだろう。テーマごとに的確にまと

め、新聞連載として再構成した小泉氏の労力には頭が下がる。多少欲を言えば、本稿は新聞連載をそのまま収録したものでないので、時系列が前後して分かりづらい部分がある。単行本収録にあたって、多少の再構成があってもよかつたと思う。三浦氏が二十六歳で校長になった背景など、戦前の学校制度に関する解説もあれば、読者の理解をより深めることになったかもしれない。一方、終戦後は学校教育に関する記述が姿を消すのはいかなる理由によるものだろうか。

第二章は「近代三戸のあゆみ」は「広報さんのへ」に平成十六年から連載中のコラムをまとめたものである。連載開始からすでに六年が経過しているが、現在も継続中で、このような長期の連載はあまり例がない。内容は昭和十一年から十五年まで刊行されていた「三戸新聞」をはじめ新聞記事や雑誌、旧家に残る写真・絵はがき、報告書等から戦前から戦後にかけての三戸町の諸相を綴ったものである。このような記事は三戸町民にとっては地元の歴史を顧みることが出来、もつとも興味を引くものである。一見すると雑多のようであるが、一定の史料に基づいた記述に努めており、単なる思い出を綴った回顧談の類ではない。旧家の史料では大庭家文書や内澤家文書など県史調査で見いだされた史料を引用し、前者では、戦前の学校のスキーや球技など導入期ののどかな様子を彷彿とさせる一方、後者では、軍事郵便にみる心ならずも戦場に動員され戦死した一庶民の記録など、第一章の三浦日記とも共通する市井の人々の記録が注目される。本稿には豊富な写真が掲載されているが、単行本の判形の制約で、広報紙連載時と異なり、かなり縮小されている。写真も現在は貴重な資料のひとつであり、やや惜しまれる。

第三章は青森県史研究や八戸市史研究に発表した論考が中心である。

松尾鉦山の開発と、いわゆる来満鉄道（三戸―鹿角間鉄道）を絡めた『「大八戸」論と松尾鉦山』や、学生時代の卒業論文を再構成した「小田為綱の『憲法草稿評林』」などが目を引く。筆者は自由民権運動研究については門外漢であるが、「北からの自由民権運動」では明治八年に作成された「憲法草案」が北奥の僻村でも筆写されており、ここ北奥地域でも自らの手で明治国家を創ろうとする動きが広がっていたことに感慨を覚えた。

補論はいささか視点を変え、『南』からのアプローチ」と題し、地域論に収まりきれない論考を収録している。修士論文を再構成した「京都府下南山城地方の自由民権運動（上）（下）」では豪農層の経済基盤などに北奥の自由民権運動との比較が出来るし、後半の二本の論考では、著者がインドネシア日本人学校に勤務した経験から、爆弾テロ事件後の生徒たちへの指導やNIE（新聞を利用した授業）の経験、今残る日本軍政の跡などを記す。特に著者が現地でお世話になった日本人国際ディレクターが元使用人に殺害されたという「付記」の記述には異文化交流の困難さ、この国の持つ複雑さについて考えさせられた。

以上、本書の内容を概観してみた。現在、編さん中の青森県史も「北からの視点」を第一に掲げている。本書も『「北」の地域史』をタイトルに掲げ、「北辺の目」で地域の歴史を学び、地域を根底からとらえ直し、再評価することが必要でないかと説いている。しかしながら、本書は「北から」「中央から」（あるいは「南から」）と対立軸でとらえるものでなく、比較的な地域論をしているのでもない。掲載する論考の内容

も、地域こそ違え、全国各地で行われていたことである。本書に通底するのは著者自身を含む、ここ青森県南という本州北部に生きる人々の営みである。これはまた、教員というもつとも地域に根ざした職業にあり、教え子に教え語り継ぐという現場をもった筆者にとって重要なことであろう。類書が少ない中で、地域の「近代史」をいかに語り継ぐか、一般の方にも是非読んで欲しい一冊であるし、地域史の編纂に携わる自分にとって、参考にしたい書である。

（A5判、北の杜編集工房、二〇一〇年、二五七一円）

（なかのわたり・かずやす 青森県史編さんグループ主幹）